



2017
平成29年

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。
お問い合わせ・ご意見は狛江市地域活性課へ

発行 ●**狛江市地域活性課**
〒201-8585 狛江市和泉本町1-1-5
☎3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp

編集・制作 ●**特定非営利活動法人 k-press**
〒201-0003 狛江市和泉本町1-35-3
ル・ミリオン・イイダ3階A号
☎3430-661 FAX3430-6743

言語や国境越えきずな深める

国際交流

狛江市に住む外国人は1,145人(3月1日現在)で、年々増加する傾向にあり、国際交流の重要性が高まっている。市内には言語や生活習慣の違いを克服するための活動や、国境の壁を乗り越えて支援の手を差し伸べる活動に多くの市民がボランティアとして参加している。

狛江市国際交流協会

狛江市国際交流協会(吉野琢也会長)は、国際相互理解と親善に寄与することを目的に平成7年発足。

ニューイヤーパーティー、盆踊りなど外国人に日本文化を紹介するイベントのほか、日本語スピーチ大会、国際交流サロンを開催、市民まつりにも参加している。昨年秋から市内の飲食店で市内在住の外国人を講師に招いて月1回「こまぐりっしゅ cafe」と名付けた英会話サロンも始めた。講師を務める米国人のダリルさんは「参加者の英会話スキルが上がっており、参加者同士が仲良くなり、楽しいムードです」と話している。吉野会長は「イベントだけでなく、会話を通して互いの文化や狛江の情報を交換するなど地道な活動を続けていき



国際交流協会のニューイヤーパーティーには晴れ着の外国人が参加

狛江市内では、地域の課題の解決に向け、多くの人を手をとり合い、さまざまな分野で市民活動を行っている。

そうした活動を、分野別に紹介する。

たい」と話し、「約50人いる会員のほとんどが日本人なので、今後は外国人の会員を増やしたい」と話している。

問い合わせは☎3430-1111 狛江市政策室協働調整担当。

狛江市公民館日本語教室



ボランティアから熱心に日本語を学ぶ公民館日本語教室

狛江市公民館日本語教室は、市内に住む外国人などに無料で日本語を教える教室で、毎週土曜日午後7時～9時20分に西河原公民館で開講している。

この教室は狛江市の国際交流のさきがけで、1980年代に市内の英語教師が自宅で中国残留孤児の二世に日本語を教えたのが始まり。その後、生徒の増加にともなって協力する市民が増え、教室を福祉会館分館(当時)に移し、平成5年から「国際交流のつどい」を毎月開催、国際交流協会誕生のベースとなった。6年に西河原公民館のオープンとともに公民館の事業となった。



協働のかたち
=新連載=

運営はボランティアで構成する日本語教室運営委員会(松村正俊代表)があたっている。昨年度はベトナムや中国、ネパールなどアジアを中心に17カ国85人の外国人が登録、25人の市民ボランティアが会話や読み書きなどを希望に合わせて教えている。また、ホームルームやバスハイクを通じて受講者たちが交流を深めている。委員会では「受講者が増えているのに対し、ボランティアが不足しており、研修もするので気軽に参加してほしい」と呼びかけている。

問い合わせ☎3480-3201 西河原公民館。

わいらいらうんじ

エコノスペース(岩戸南1-6-23)は、日本に短・中期滞在する外国人のための賃貸アパートで、地域の日本人や来日中の外国人旅行者とふれあうコミュニティーラウンジを設けているのが特色。米国生活30年以上という体験を元に「国際交流は日常的なふれあいが大切」と不動産業などを営む小川和巳さん(64)が平成27年に所有するアパートに開設した。居室16室のほか、ダイニングキッチンやバス・シャワールーム、洗濯室を備えており、オープンから約一年半でのべ20カ国約1,000人が利用した。

交流の中心となっているのが「わいらいらうんじ」で、ガイドブックやCDなどを備えた本棚、ダイニングテ



わいらいらうんじで談笑する外国人の利用者と小川さん(中央)

ブル、ソファなどを置き、利用者の憩いや交流のスペースになっており、パーティーやコンサートも開かれる。また、外国人向けの日本語や英会話の教室としても使われている。

小川さんは「日本の国際化はもっと進むと思います。これからは日本文化の押しつけではなく、習慣や考え方の違いを互いに理解し認め合うことが大切で、ここから世界中に友人の輪が広がることを願っています」と話している。問い合わせM201komae@gmail.com 小川さん。

ESAアジア教育支援の会

認定NPO法人ESAアジア教育支援の会(浅田美知子理事長)は、貧困で学校に通えないアジアの子どもに基礎教育を受けられる環境を作ろうと「教育こそが子どもの未来への道」を目的に昭和54年に設立、平成12年に世田谷区喜多見から狛江市東和泉へ移転した。

活動を行っているのは、バングラデシュとインドの貧困地域6カ所にある14施設。現地のパートナーと協同で基礎教育や学用品、制服の支給、給食の提供のほか、指導者の育成や職業訓練などを行っている。

活動への理解と支援の輪を広げるため、海外の貧困地域の現状を伝える啓発活動を行っている。「幼いうちから世界には日本と異なる生活をしている人がいることを知ることが大切」と19年に市立藤塚

保育園の5歳児を対象にアジアの貧困地域の写真などを使った国際理解講座を初めて開催。他の公立保育園にも活動を広げ、26年には狛江市市民公益活動事業補助金を受け、幼児向け教材「みんなちがうけど、しあわせいっしょ」を作成、市内の保育園、幼稚園、小学校に配布した。

ボランティアが教材や翻訳絵本づくりに参加するプロジェクトも実施、夏休みなどに狛江市市民活動支援センターなどの協力で体験ボランティアを受け入れている。また、教育支援を目的にインドカレーのスパイスを販売しており、スパイスの袋詰めを行うボランティアを常時募集している。

問い合わせ☎5497-2261(月・火・水)午前10時～午後5時 ESAアジア教育支援の会。

チームピースチャレンジャー狛江支部

チームピースチャレンジャー(中山寛子代表)は、狛江市在住の藤田彩知代さんら3人の女性で平成19年に発足したNGO団体で、24年に狛江支部が開設された。インドのビハール州の村の女性に洋裁や編み物の技術を指導する職業訓練場を開設、現地の人が作った製品を適正な価格で販売して、発展途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指すフェアトレードを行っており、首都圏各地に支部がある。

狛江支部では24年に狛江市市民公益活動事業補助金を受けてフェアトレード製品の展示会を開催したほか、ボランティアを対象にした講習会を開いている。

展示会などをきっかけにイベントを手伝ったり、インドへ洋裁などの指導に行くボランティアも多い。和泉本町の桑原繁宗さんは、フェアトレード展の商品搬入・搬出や活動を記録する写真撮影を



海外に贈る翻訳絵本づくりをするボランティアの子どもたち(ESAアジア教育支援の会)

担当。岩戸北の大久保重美さんは、インドで技術指導をしたほか、小物の商品開発や販売なども担当している。

同支部では19日(月)～22日(木)午前10時～午後6時に泉の森会館でフェアトレード展を開催する。

問い合わせ☎090-5673-9527 藤田さん。

日本語指導員

市内の公立小・中学校には「日本語指導員」派遣制度があり、日本語に不慣れた児童や生徒が授業内容を理解したり、学校生活に慣れるための支援を行っている。

この制度は平成5年にでき、外国籍や帰国子女などを対象に、学校の要請で市教育委員会がその子が日常使っている外国語に精通した人を派遣する。指導員は児童・生徒の教室に出向いて、授業内容の通訳や学校生活になじめるようサポートする。期間は週4時間を限度に原則3カ月間だが、状況に応じ学校・市教育委員会と延長を協議できる。

平成28年度は8人の児童・生徒に3人の日本語指導員が対応した。

指導員のひとり、施凱紅さんは中国出身で、日本に留学して就職、一時帰国した後、平成26年に再来日して狛江市へ転居、その年に指導員になり、これまでに中国などの小・中学生10人に日本語を指導した。また、施さんの息子も、中学校へ入学したとき、日本語が得意ではなかったため、別の指導員のサポートを受けた。

施さんは「言葉の壁だけでなく、生活習慣の違いにとまどうことが多かった」という自身やわが子の体験から指導員の必要性への理解が深い。授業内容の通訳だけでなく、学校のルールや考え方の違いをていねいに説明したり、休み時間や放課後に子どもの悩みを聴いたりして、学校生活に早く慣れるよう気を配るほか、学校から家庭向けに出されるプリントの通訳など保護者のサポートもしている。